

## 東京バレエ団が描く、 巨匠プティパの美の極致

村山 久美子  
舞踊評論家/舞踊史家

現在世界で上演されている古典バレエ作品の大半は、19世紀後半にロシアの帝室マリンスキー劇場で、振付家マリウス・プティパが制作、あるいは、大幅に改変したものである。チャイコフスキーの3大バレエと言われる(チャイコフスキーは3つしかバレエを作曲していないのであるが)「白鳥の湖」「眠れる森の美女」「くるみ割り人形」も、プティパが振付演出を行ったり、あるいは、制作で主導的役割を果たしている。そして、20世紀以降のバレエは、プティパの古典作品をもとに、新たな要素を加えて発展してきたのである。つまり、プティパは、現在の世界のバレエの生みの親であり、プティパがいなければ、世界中で愛され続けている美の極致のようなバレエは存在しなかったと言っても過言ではない。

その偉大なバレエの父の、今年は生誕200年にあたり、ロシアをはじめとして様々な記念行事が行われている。東京バレエ団の「プティパ・ガラ」も同様の記念公演であり、巨匠プティパの作品がいかにすばらしいかを示すプログラムである。



「ラ・バヤデー」より”影の王国” ©Kiyonori Hasegawa

プティパの創作の特長でまず第一に挙げたいのは、群舞の美しさ。19世紀前半に様々な芸術で大きな潮流となったロマン主義から脱却して新たなものを生み出すために、19世紀後半に大作を発表していったプティパは、古典主義に範を求めた。そうして、古典主義の特徴である対称形で、群舞の様々な変化してゆく隊形を生み出したのである。今回の演目ではとくに、「ラ・バヤデー」の、峡谷の間で真っ白の衣装を着た大勢のバレリーナたちが憂いに満ちた幻想的な踊りを見せる“影の王国”や、「ライモンダ」の、ハンガリアン・ダンスのテイストを加えたバレエで厳かに華やかに踊られる結婚式のシーンなど。そこで見られる、ソリストと群舞の多様な立体的模様の変化は、まさに息をのむ美しさである。もちろん言うまでもなく、この振付の美しさを体現できるかどうかはダンサーたちの能力にかかっている。そして東京バレエ団は、プティパの群舞を究極の美しさで描くことができる、世界に認められた理想的カンパニーなのである。

プティパの作品のもう一つ大切な特長が、ソロやデュエットで駆使されている高度で見ごたえのある技や、女性のレース編みのような繊細優美で複雑な踊りである。バレエには演劇性が強く、踊りでの感情表現を重視して、技のレベルを落としていたり、動きのフォームの精度を厳格には要求しない作品もある。しかしプティパの作品は、役にふさわしい内面の表現は求められつつも、振付の動きを最高のレベルでこなさなければ、作品が輝いてこない。それだけ、観客を魅了する美しさと鮮やかで高度な技で組み立てられた振付なのである。現在東京バレエ団のソリストたちは、掛け値なしに、世界を舞台に活躍できるレベルのダンサーである。プティパの名作をどれほど美しい光で輝かせてくれるか、楽しみでならない。



「ライモンダ」より 上野水香、柄本弾 ©Nobuhiko Hikiji

東京バレエ団<プティパ・ガラ> 9月1日(土)14:00 開演 神奈川県民ホール大ホール

全席指定 S¥10,000 Sペア¥19,000 A¥7,000 B¥5,000 C¥3,000 学生(24歳以下・枚数限定)¥2,000 ※未就学児入場不可(託児有・要事前予約)

[ご予約] チケットかながわ Tel. 0570-015-415(10:00-18:00) <http://www.kanagawa-arts.or.jp/tc/>

[問合せ] 神奈川県民ホール事業課 Tel. 045-633-2028 主催: 神奈川県民ホール(公益財団法人神奈川芸術文化財団)

共催: Dance Dance Dance @ YOKOHAMA 2018 横浜アーツフェスティバル実行委員会

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)独立行政法人日本芸術文化振興会

プレレクチャー同日開催! 詳細は Web で